様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：２３８０３
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2009～2011
課題番号：21320124
研究課題名（和文）　第二次世界大戦と日本の情報戦

研究課題名（英文）　Japan’s intelligence war in World War II

研究代表者
森山 優（MORIYAMA ATSUSHI）
静岡県立大学・国際関係学部・准教授
研究者番号：60295566

研究成果の概要（和文）：①日本、アメリカ、イギリス、オーストラリアの文書館を調査し、外交・インテリジェンス関係の一次史料を収集した。従来の研究では見逃されてきた多数の貴重な史料を発掘できた②これらの史料を整理して、その一部をデータベース化した。③先行研究を収集して、問題点を検討した。④収集した史料を総合し、日本の情報戦に関する理解を深化させた。⑤成果の一部を学会報告・論文・書籍、マスコミ取材等で発表・発信し、学界のみならず一般社会に向けて研究の意義を強調した。
研究成果の概要（英文）：(1)We have researched historical documents stored at archives of Japan, the US, the UK and Australia and collected the primary documents on diplomacy and intelligence. We could dig up a lot of valuable documents, which were not fully reviewed by previous studies. (2)We have compiled a part of collected documents in a database. (3)We have also collected previous academic studies and discussed their problems. (4)We have improved our understanding of the Japan’s intelligence war through the collected documents. (5)We have stressed the significance of our study to the public by publishing books and academic articles and also presenting a part of study to the academy and the mass media.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2010 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2011 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総　計	5,700,000	1,710,000	7,410,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：日本政治外交史　政治過程　インテリジェンス　アメリカ外交史　イギリス外交史　軍事史　政軍関係

１．研究開始当初の背景

⑴当該期の政治外交史に関する実証的な研究としては、①日本の意思決定システムの分析を主題とした、森山『日米開戦の政治過程』吉川弘文館、1998 年、森茂樹「戦時天皇制国家における「親政」イデオロギーと政策決定過程の再編--日中戦争期の御前会議」『日本史研究』454、2000 年、②日本外交に関して、森茂樹の松岡外交を対象とした論文（「第二次日蘭会商をめぐる松岡外相と外務省--「好機便乗的南進」説の再検討」『歴史学研究』766、2002 年、「松岡外交と日ソ国交

調整--勢力均衡戦略の陥穽」同 801、2005 年)、森による情報宣伝活動に関する「太平洋戦争前夜の対米外交と世論工作--松岡洋右とロイ・W・ハワード」『日本史研究』559、2009 年 3 月、東郷外相の開戦外交に関する森山「開戦外交と東郷外相--乙案をめぐる攻防」『東アジア近代史』12、2009 年 3 月などが公刊されてきた。

⑵インテリジェンス研究としては、森山「戦前期における日本の暗号解読能力に関する基礎研究」『国際関係・比較文化研究』3、2004 年、同「戦時期日本の暗号解読とアメリカの対応--暗号運用の観点から」『インテリジェンス』9、2007 年、宮杉浩泰「戦前期日本の暗号解読情報の伝達ルート」『日本歴史』703、2006 年、同「第二次大戦期日本の暗号解読における欧州各国との提携」前掲『インテリジェンス』9 のように、各国（特にアメリカ）のアーカイヴの史料を駆使した緻密な実証的な研究が進められてきた。

⑶イギリスについては、小谷賢の「イギリス情報部の対日イメージ 1937-1941-情報分析と現実とのギャップ 」『国際政治』129、2002 年、「イギリスの外交戦略とインテリジェンス--南部仏印進駐問題とイギリスの対応を例に」『国際安全保障』122、2003 年、「1941 年二月の極東危機とイギリス情報部」『軍事史学』153、2003 年、『イギリスの情報外交』PHP、2004 年などの一連の著作にみられるように、外交とインテリジェンスを不可分の形で論ずる議論が積み重ねられてきた。

２．研究の目的

本研究では、このような多角的な研究を総合し、かつ精緻な実証的基礎を確立することで、当該期の日本の情報戦を立体的に理解することを試みた。従来のオーソドックスな外交史に二つの新たな要素を加え、重層的な学問体系として再構築することである。

新要素の一つは「関係性」の概念（各国の外交政策の相互連関はもとより、日本の国内政治と外交との相互規定的関係をも包含する）の導入であり、もう一つは外交史とインテリジェンス研究との総合である。

各国の政策決定をこれら二つの角度から検討することで、とかく一国史的もしくは二国間関係史的な枠組みに陥りがちであった従来の歴史研究を超えた、新たな国際関係史の構築をめざした。

３．研究の方法

本研究は、マルチ・アーカイヴァル的手法をとっている。これまで一国史の枠にとどまりがちだった実証研究を、より客観的に発展させて全体像を捉えるには、各国の史料から多角的に光を照射させる作業が必要である。

そして、近年のデジタル技術の進化により、短時間で大量の史料をデジタル・カメラで撮影・収集することが、さほど困難ではなくなった。

また、とかく利用にあたって不便さがつきまとったマイクロフィルムも、スキャニングによりデジタル化することで、操作の利便性が格段に向上した。

そして、入手した史料をパソコン上で整理・目録化、さらにそれらをリンクしてデータベース化することで、従来は断片的だった事実を集積し、総合的に分析することが可能となった。

４．研究成果

史料収集と整理に関し、二部構成とした

⑴諜報史研究からのアプローチ
⑵外交史研究からのアプローチ

もちろん、⑴と⑵は渾然一体となっているため、厳密に分離することは不可能である。報告書としての読みやすさを考慮し、便宜上二部に分けることとしたが、たとえば軍事史関係のように双方で記述されているケースもある。

⑴諜報関係の史料の発掘と収集・整理、国内史料との照合作業～インテリジェンス研究の角度から

この分野は、当該期における日本及び連合国の情報戦の解明に資するのみならず、日本側における軍事・外交関係史料の欠落を埋める有力な手段でもある。すなわち、連合国側が傍受解読した日本の通信類の記録は、日本側のオリジナルが失われている場合が多々あり、これらの解読記録が不完全ながらもその代替となり得るからである。

森は、従来から、日本の情報戦の中でも情報操作すなわち宣伝やプロパガンダに関心を持ち、米国の朝野に向けたこうした工作に関する調査を進めてきた。そのためには、工作の記録となる現地との通信を相当詳細に調査する必要があり、こうした観点から情報戦関係の史料の重要性に着目し、調査を進めた。

収集した史料は以下のとおりである。

①英国の諜報活動に関する文書　英国公文書館（The National Archives～旧 Public Record Office）

近年公開が進んでいる文書群である。

・通信傍受記録　2009 年夏に森山優・森茂樹・小谷賢の三名で英国公文書館の調査を行ない、HW-12 シリーズ（対米英開戦直前の時期に、英国側が日本の通信を傍受解読した記録）を複写（デジタルカメラによる）した。森は 1940 年の一部と 1941 年前半、森山は

1941 年後半の部分を担当し、帰国後、整理・目録作成を進め、1941 年 6 月末から 12 月までのリスト化を完了した。
・イギリス暗号関係文書（HW40）　本史料群は、イギリスが傍受した日本側の暗号解読電報や、日本による暗号解読がどの程度イギリスの暗号技術に対して有効であったかを調査したものである。日本の解読能力についてきわめて有益な材料を提供する。
・武官電関係　また小谷は、2010 年春にも英国公文書館を調査し、在欧日本陸軍武官の通信傍受記録（解読電報）を閲覧した。後述するアメリカの手になる武官電と同様、日本国内に原文が残されていない貴重な史料である。
・ＭＩ５関係　2012 年春、宮杉は英国公文書館の調査を実施し、公開されたＭＩ５の個人ファイルを調査した。青木盛夫（外交官）、小野寺信（陸軍軍人）、日本が雇った外国人エージェントの記録という有益な史料を収集した。
・日本軍人・外交官に対するイギリスの尋問調書　同じく宮杉は、イギリスが戦後に東南アジアで日本の軍人（藤原岩市、磯田三郎）や外交官（和田周作）に対して行った尋問調書を発見した。これは日本の南方進攻作戦や占領地行政研究にも資することが可能な史料群である。
②米国の諜報関係文書　米国公文書館(National Archives and Records Administration = NARA)　2010 年冬と 2011 年の春（宮杉）2010 年春と夏（森）に実施。主に RG457(National Security Agency)を対象とした。
・日本の外交・武官電報の傍受解読記録の調査
　代表的な史料である Magic（1940 年から使用開始された日本外交暗号電報～米側が「purple」と呼んだ～の傍受解読記録）は既に調査済みであるため、それ以前の史料と、Magic を補完する文書類の調査と複写を行なった。
　宮杉の調査対象の一つは、米側が「Red」と称した日本の外交暗号（「purple」以前に使用されていたもの）である。これらは、日本側にも残されていない電報を数多く含んでおり、国内の史料と照合することで、日本外交史研究に大きく寄与することが期待される。たとえば、日本が中国の暗号を解読して利用していたことは従来から指摘されていたが、本史料群は、このことを実証的に裏付けている。宮杉は主に 1937～8 年の時期を対象に、2010 年冬と 2011 年の春の二回にわたる調査で閲覧、収集した。
　また、日本の在外陸海軍武官と東京の通信の傍受解読記録類（RG457 SRA シリーズ）を森（担当部分：開戦前）と宮杉（同：1944～45 年）で調査した。従来、米国が日本陸軍の通信の解読に成功したのは日米開戦後だったため、開戦前の解読文書は存在しないと考えられてきたようである。しかし、2010 年春に目録を詳細に調査した結果、史料の末尾部分に、開戦前の通信の解読文書が大量に存在することが確認された。解読された時期は、ほとんどが 1943 年以降である。開戦前に傍受してはいたものの解読されないまま保存されていたものを、参考用に改めて解読したものと推測される。
　海軍武官の通信(RG457 SRNA シリーズ)は、ほぼ時系列に沿った NARA 作成の目録があり、開戦前の通信が相当に含まれていることも従来から知られてきた。しかし、日本の研究者による包括的な調査は行われていないようである。
　これらの武官による通信の原文は、外交史料館や防衛研究所所蔵の史料群や国会図書館憲政資料室の個人文書中に断片的に見出すことができるが、まとまった史料群は一部を除いて見当たらず、この欠落を補完する貴重な史料と考えられる。森は 2010 年夏に、宮杉は 2011 年春に、上記２つの史料群の調査を行い、デジタルカメラを利用して複写・収集するとともに、一部の目録を作成した。
　多くの武官電が明らかとなったことで、当該期の日本の情報収集状況を具体的に理解することが期待できる。特に開戦と終戦にあたって、ヨーロッパ駐在の武官がどのような観測をもっていたか、従来よりもさらに実証的な研究成果が得られるだろう。
・尋問調書
　米陸軍のＧ２が戦後に日本の外交官やドイツの通信情報関係者を尋問した記録（Records of the Investigative Records Repository)。宮杉は、白鳥敏夫、須磨弥吉郎のファイルを閲覧し、彼らの情報活動の全体像の把握に努めた。
　また、Archives Source Files にはドイツの通信情報関係者の尋問記録もあり、ドイツが日本との通信情報協力に対してどのような認識を持っていたかが明らかとなった。
③個人文書類の調査
　情報戦の背景を明らかにするため、情報活動に関する情報が含まれている個人文書の調査を実施した（森・小谷)。
　小谷は 2010 年春、キングス・カレッジのリデル・ハート・ミリタリー・アーカイヴで調査を実施し、極東英軍司令官の史料を調査した。これは極東イギリス軍の対日戦争準備に関する文書で、英側も通信傍受によって日本軍の動向を窺っていたことを示す重要な史料である。
　森は 2010 年夏に米国 Hoover Institution, Stanford University において、日米開戦直前の時期に駐日大使館付海軍武官であった

スミス＝ハットン大佐(Captain Henri Harold Smith-Hutton)の個人文書を調査した。同文書には 1974 年にスタンフォード大学が行ったスミス＝ハットン大佐へのインタビューが収録されており、開戦前の情報戦に関する貴重な証言が含まれている。

④国内史料との照合作業

さて、米英の傍受史料を日本側における史料の欠落を埋めるものとして捉えた場合、対応する日本側の文書類の残存・保存状況を調査し、上記史料群と比較して、オリジナルのどこに欠落があり、上記史料群がどの程度それを補完し得るのかを検証する必要がある。また、傍受解読の上に翻訳を行っているという性格上、上記史料群の内容はオリジナルを完全に正確に写し取っているものとは言い難い。ゆえに、その精確さを検証するためにも、可能な限り残存するオリジナルとの比較検証が必要となる。

そのために、日本側史料との照合が可能な態勢を構築することが次の課題となる。森は、その一環として、2011 年中に国会図書館憲政資料室において「外務省文書」史料の調査を行なった。同文書は、占領期に米国国務省と米国議会図書館が外務省の文書類をマイクロフィルム化したものであり、その一部は東京裁判に際して国際検察局に押収され、証拠書類として用いられた。その後、これらの文書類はほとんどが返還されて外務省外交史料館に外務省記録として保存されているはずであるが、その段階で原型のファイルはバラバラにされ、所在が不明な部分もあるようである。そこで、敢えて外務省記録を用いず、原型により近い「外務省文書」を照合用に用いることにした。

対米英開戦前の電報類は、同文書中の「極東国際軍事裁判関係資料」(IMT シリーズ) に収録されている。これらを調査して電報類を可能な限りピックアップし、マイクロフィルムの複製の形で収集した。その後プリントアウトして紙媒体の形でファイル・整理し、照合用の目録を作成した。

⑵イギリス・オーストラリア・日本の外交文書の収集と整理～外交史研究の角度から

①外交文書

・イギリス外交文書

これまで収集した文書の整理・スキャニングとデータベース化

森山が以前から収集していた英国公文書館の外交文書 (FO371、FO436、主に 1941 年) のマイクロフィルムの一部をフィルムスキャナーでスキャニングし、その一部の目録を作成した。

また、英国公文書館では、FO371 (1940 年の一部) のデジタルソースでの販売を開始したので、購入した。

小谷は 2012 年春の英国公文書館の調査で、日米開戦期におけるロンドンの英外務省とワシントンのイギリス大使館関係の史料を調査した。その結果、アメリカの対日外交に対するイギリスの態度が明らかとなる成果を得た。

※イギリスの外交文書は、従来とかく日米関係からの視点でのみ捉えられてきた開戦外交に、別の角度から光を照射することが可能となる素材である。そして、アメリカ外交そのものについても、イギリスの立場から再検討することで、これまでとは違った意味を見いだすことができることが期待される。

・オーストラリア外交文書

オーストラリア公文書館(The National Archives of Australia)の調査 (森山、2011 年冬)。

調査にあたり、以前に作成していたオーストラリア外交文書 (Documents on Australian Foreign Policy) の目録を、さらに詳細なものに加工し、効率的な調査をこころがけた。

現地では、インターネットで公開されていない外交文書・インテリジェンス関係文書を中心に調査し、デジタルカメラで複写した。

※オーストラリアの外交文書も、イギリスのものと同様、当該期の外交史研究に再検討を迫る素材である。

・日本外交文書

上記 (⑴の④) との関連作業の意味もあるが、アジア歴史資料センターでネット公開されている日本外交文書『日、英外交関係雑纂』の電報を目録化した。

②研究書籍・関連史料の購入・複写

さまざまな関連文献を収集したが、主なものは下記の通りである。

・外務省『日本外交文書』日中戦争全４冊が発刊されたので、購入した。

・近年公刊された、外交・軍事・情報史関係の英文書籍を購入した。

・公刊されているカナダの外交文書を、図書館の相互利用にて取り寄せ、必要部分を複写した。

・オーストラリア・カナダの軍事・外交関係書籍を同様に取り寄せ、必要部分を複写した。

むすび

以上のようなマルチ・アーカイヴァルな調査を実施した結果、当該期の情報戦に対するイメージは大きく変貌を遂げようとしている。個々の史料群の評価は重複を避けるが、収集した史料が膨大な量に及んだため、それらの整理と分析は、今後の課題である。

不充分ながらも、史料を概観した現段階での見通しを要約すれば下記の通りである。

１、政治外交史とインテリジェンス研究の関係

当該期の各国が、情報収集に全力をあげて

いたことが、史料的にも明らかとなった。政治・外交とインテリジェンスは密接不可分であり、今後はこのことを前提としない研究は想像しがたいことが確認できた。
２、一国史的「正史」の再検討
　各国の一次史料を数多く収集した結果、一国の「正史」の枠内には、とても収まりきれない多くの要素が切り捨てられていることが判明した。このことは、各国の「正史」の限界を示すと共に、新たな国際関係史の可能性を導くものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
宮杉浩泰「知られざる外務省の情報戦－調査部第六課と日米開戦」『歴史読本』査読無、第 57 巻 1 号、198-203 頁
小谷賢「情報敗戦 ： 日本もまた米英の暗号を解読していたが」『中央公論別冊　徹底研究 日本国の「失敗の本質」』査読無、2012、42-49 頁

〔学会発表〕（計８件）
森山優・森茂樹「第二次世界大戦と日本の情報戦―外交史研究とインテリジェンス研究の架橋―」九州史学研究会近現代史部会、2009 年 6 月 13 日
宮杉浩泰「ハルビン特務機関特別諜報―ソ連の欺瞞工作に対する日本の対応」軍事史学会平成 22 年度年次大会、2010 年 5 月 16 日
Kotani, Ken “The US-Japanese Negotiations in 1941 and Signals Intelligence”, (Association for Asian Studies, Honolulu convention center, 31 March, 2011)
宮杉浩泰「昭和戦前期日本のインテリジェンス」コモン国際情勢研究会、2011 年 5 月 20 日
宮杉浩泰「外務省の情報活動の再編成―日中開戦から対米開戦まで」国際安全保障学会 2011 年度年次大会、2011 年 12 月 10 日
森山優「「国策再検討」とは何だったのか」日本国際政治学会 2011 年度研究大会日本外交史部会、2011 年 11 月 11 日
森山優「陸海軍の開戦決意と状況判断」偕行社・軍事史学会共催　近現代史研究会、2012 年 2 月 24 日
宮杉浩泰「外務省の情報活動の再編成―日中開戦から対米開戦まで」コモン国際情勢研究会、2012 年 3 月 23 日

〔図書〕（計４件）
森山優「日本はなぜ開戦に踏み切ったか-両論併記と非決定」新潮社、2012、224 頁
森山優「“非決定”という恐るべき「制度」」NHK 取材班編著『日本人はなぜ戦争へと向かったのか　下』NHK 出版、2011 年、128-148 頁
小谷賢「外交に活かせなかった陸軍暗号情報」NHK 取材班編著『日本人はなぜ戦争へと向かったのか　上』NHK 出版、2011 年、72-89 頁
Kotani, Ken *Japanese Intelligence in World War II*　Oxford: Osprey Publishing 2009, 229pp

〔その他〕
・マスコミ関連
テレビ番組
NHK　ＢＳ歴史館「真珠湾への７日間～日米開戦・外交官たちの苦闘」（2011 年 12 月 8 日放送）に出演。日米交渉における日米の情報戦についてコメントを行なった（小谷賢）
NHK スペシャル「日本人はなぜ戦争へと向かったのか」
第１回　“外交敗戦”孤立への道（2011 年 1 月 9 日放送）に出演（小谷賢）
第４回　開戦：リーダーたちの迷走（2011 年 3 月 6 日放送）に出演（森山優）
第１回は、縦割り組織における情報共有の問題について取材に協力した。
第４回は、番組の柱となる「非決定」の構造について取材に協力し、その後も助言を与えた。
新聞
「負け戦　封じられた予測」『中日新聞』2011 年 12 月 8 日。記者の執筆にあたり、インタビューを受けた（森山優）
・書評
宮杉浩泰「Roger Dingman, Deciphering the Rising Sun: Navy and. Marine Corps Codebreakers, Translators, and Interpreters in the Pacific War」『戦略研究』9、2011 年、153～159 頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
　森山　優（MORIYAMA ATSUSHI）
　静岡県立大学・国際関係学部・准教授
　研究者番号：60295566

(2)研究分担者
　森　茂樹（MORI SHIGEKI）
　久留米大学・法学部・准教授
　研究者番号：60330492

(3)連携研究者
　宮杉　浩泰（MIYASUGI HIROYASU）
　明治大学研究・知財戦略機構・研究員
　研究者番号：30613450

※研究協力者
小谷　賢（KOTANI KEN）
防衛省防衛研究所・主任研究官